



沼田早苗
「写真家」

森林と海との大切な関係
ファインダーからみた
世界の森林

私は、海と山が近くにあった横浜で生まれ育ちました。夏の遊ぶ場所といえば海で、子どものころから父の運転する車で海水浴に行きました。そしてもう一つ楽しみだったのが同じ神奈川県網島にある母の実家を訪ねることでした。こちらは山の暮らして竹の子掘りやザリガニ釣り、牛小屋での乳搾りなど、のどかな田舎の暮らしを楽しみました。そんな経験から、海の魅力も山の楽しさも小さいころから満喫し、両者は自分の中で、結びついていました。

私は平成元年から「新しい農村計画」という冊子の表紙写真を撮り続けています。農村を訪ねて撮影するのです。もともと農村アメニティという農山漁村を表彰する活動の審査委員を二三年ほど続けていたこともあってこの撮影をするようになりました。

岩手の室根村（現一関市）では宮城県気仙沼市唐桑町の漁師さんたちが二万本のブナを植林している光景を撮影しました。「牡蠣の森を慕う会」として森林が元気でなければ海も育たない、とはじまった活動だそうです。森林は海の恋人という言葉どおり、海と森は一体だという幼少期の経験を思い

出させてくれました。

また、北海道の滝上町では町の生活に対応できない子どもを預かっている「子どもの村」に行きました。そこでは子どもがいきいきとしていて、「町にはなんにもないけどここにはなんでもある」と語ってくれた深い意味のある言葉が素直に理解できました。

また海外にも撮影にいきました。マダガスカルでは空から地表を見ましたが、焼畑で丸坊主になった山が続ぎ、温暖化や洪水の問題を実感しました。中東や中国の荒涼とした世界では木の無いところを旅することは試練であると思いが知らされました。やはり森林は日本人の私の心を癒してくれれます。

木とは何か、と聞かれるととても強いものだと思います。ハカラメと呼ばれる木は葉一枚から芽が出て繁殖させることができます。生命力の旺盛さを見ていると木から気をもらえるように思っています。日本の森林とともに育ってきた生活文化を今後も見守り続けていと思っています。

プロフィール

沼田早苗（ぬまた さなえ）

68年、大竹省ニスタジオで助手を務める。86年より10年間雑誌「財界」表紙連載を手がける。87年より05年まで国土庁農村アメニティ審査委員、98年より小笠原諸島振興開発審議会委員を務める。07年より林野庁林政審議会委員。出版物に写真絵本「ぼくのおじいちゃんのかお」（徳間書店）ほか。写真展は、77年個展「私の写真録・PART1」、05年JICA事業紹介写真展「歴史とともに生きる」ヨルダン・シリアほか多数。

Sanae Numata